

「世間」と「社会」

野崎隆一（神戸まちづくり研究所 理事長）

新聞の書評に惹かれて「同調圧力」（講談社現代新書）を買って読んだ。日本人には「世間」と「社会」二つの世界観があり、「世間（community）」とは、地域・親族・会社など、直接間接問わず、自分に何らかの関係のある人たちだけで形成される世界のことであり、「社会（society）」とは自分とは関係がないが法律（ルール）や制度で定義づけられている世界のことだという。大半の日本人は「世間」に住んでいるけれど、「社会」には住んでいないとも言っている。また「世間」とは、日本人が集団となった時に発生する「力学」でもあり、それが「同調圧力」になるという論旨だ。コロナ禍で強制されていないのにマスク着用が定着するなど、好ましい面もあるが、一人で異を唱えるのが難しいというネガティブな側面もある。論旨に100%同意できる訳ではないが、なかなか上手い説明だと思った。

平時の「まちづくり」でも、「復興」でも、コミュニティの重要さが、当然のように語られる。しかし、どのようなコミュニティを獲得するのが語られることは稀である。過去から継承して失われたコミュニティ（世間）は、回復に値するものだったのだろうか？私たちのコミュニティ観の根底には、集落での役割分担や困窮時（戦後）の助け合いのイメージが深く浸透している。都市への移住者は、そうした集落のシガラミのネガティブな面から解放されたいと感じているのも事実である。一方、現在の集落でも高齢化が進み、シガラミの前提となる役割分担そのものが既に困難になっている。

まちづくりでは、今でも「地域愛」「地域自慢」は、重要なキーワードである。かつてのつながりを思い出し地域の人々を鼓舞するためであるのは理解できるが、外部からの転入者にとっては「同調圧力」となる。開かれた居心地の良い場所になるためには、「世間」ではなく「社会」を作る覚悟が求められているように思います。「仲間意識」や「根回し」、「暗黙の了解」に依存した「世間」ではなく、話し合いの「マナー」や「ルール」が共有される「社会」にこそ、そのヒントがあるように感じます。ある社会学者は、「共同体に必要なのは、同化を求めない連携だ」と言い、哲学者ヘーゲルも「共同性は、究極の自由だ」と言う。人は孤立して生きることはできない。「世間（community）」と「社会（society）」を意識して、両にらみし続けることが重要だと考えている。

*ひょうごラジオカレッジ機関誌への寄稿をリライトしました。

【特集】『私と兵庫・神戸』『私と地域』『フリーテーマ』

第4号特集はゆるやかな感じだと、『私と兵庫・神戸』『私と地域』『フリーテーマ』の3つのテーマでまち研会員に自由に投稿してもらいました。

※当初、2021年1月の「こうべあいウォーク 2021」での発行を予定していましたが、準備が遅れて4カ月後の発行となりました、年末の投稿だったと読み替えてください。

『西須磨の成立』

萩原 正五郎（理事、萩原都市・建築計画事務所所長）

現在の須磨区は江戸時代には板宿、大手、東須磨、西須磨、妙法寺、車、白川、多井畑の8つの村からなり、狭い意味での須磨は西須磨村を指し、畿内の西のシミがなまってスマになったという説もある。この西須磨は元々農村、漁村を主にした静かな寒村で、北の田園ゾーンと南の海辺ゾーン、そして東西の西国街道、そこから延びる須磨寺、天神社への参道が僅かな軸を形成していたものと思われる。須磨寺は平安時代の始め、漁師が和田岬の沖で引き揚げた聖観音像を仁和2年（886年）に聞鏡上人が須磨の地に移したのが始まりである。また天神社は菅原道真公が九州に左遷された際の風雨を避け一時上陸した地と言われている。明治時代では目立つ建物としてはこの須磨寺、天神社であり、ほとんどが田畑と点在するため池で、集落は現在のJR須磨駅東側に漁村として形成されていた程度であった。大正時代に入り、旧国道（西国街道）沿いに建物が増加、兵庫電気軌道（現在の山陽電鉄）、武庫離宮（現須磨離宮）、住友邸（現須磨海浜公園）の整備、須磨駅北西方面高台の住宅整備が行われ、大正時代後期から昭和時代にかけて、西国街道沿い、須磨駅周辺、須磨寺参道等にはさらに建物が増加し多くのため池は埋め立てられて宅地化された。

その後須磨駅北西方面高台ゾーンが周辺に拡大し、良質の住宅が立地、また離宮道沿いも邸宅が立地し、天神社周辺等も住宅が増加して今日の西須磨地域の原型が形作られたようである。

『私と兵庫・神戸』－幼少期の神戸の思い出－ 野崎 瑠美（会員、株式会社遊空間工房）

物心ついてから今まで人生の殆ど全てを神戸で過ごし、神戸の何について書いたらいいのか気持ちがまとまりませんが、自分の記憶の掘り起こしのために、幼少時の神戸の風景を少し紹介しようと思います。

神戸に住み始めたのは、終戦後すぐ2年後くらいで、記憶もぼんやりした2歳くらいからになります。戦争によってすべてを失って生活が全く変わってしまった両親の嘆きをいつも感じつつも、小さな新しい家での庭からの眺めは今も目に焼き付いています。神戸で

も灘区の摩耶ケーブル下辺りの高台で、敷地が道路から3~4メートル高い位置にあり、小さな私は、庭の大きな石の上に立って、塀の外の景色を一日中見ていました。周りはまだ空き地が多く遮る建物もなく、遠くの海まで見えていました。船の汽笛の音を聞きながら一日中飽きず眺めていたので、その頃の私は真っ黒に日焼けして、近所に住んでいた同じ年頃のインド人のハーフの女の子と間違われるほどによくからかわれていました。家の前の坂道はバス道でしたが、滅多に通らない車の合間をぬって、近所のガキ大将達の後について道路でも遊んでいました。板をつなぎ合わせた台座にキャスターを付けた手作りの台車に乗せてもらい坂道を勢いよく走らせて危ないこともあり、大きなアメ車を急停止させ、出てきたアメリカ人にもものすごい剣幕で怒られたこともあります。近所のそこら中が空き地だったので、二歳上の兄の後にくっついて缶蹴りをしたり、草履隠しをしたり、ビー玉で遊んだりもしていました。空き地は、それから10年もしない間に次々と埋まっていき風景もすっかり変わりましたが、幼少期の懐かしい思い出は今も心の中に刻まれています。

『兵庫、神戸と私の近況』

森栗 茂一(大阪大学招聘教授、神戸学院大学教授)

この4月、35年間ぶりに、神戸勤務に戻った。18歳で、神戸の某国立大学を首席で不合格になり、一時、鈴蘭台高校、長田工業高校にいたが、長い大阪勤めであった。

大阪はありがたい。

歴史のある大都市を歩き、聞き、学んだ。池田や天王寺の旧師範学校のままの老朽校舎だったが、見識ある師、親切な友、楽しい市民に出会った。大阪は、出身に関係なく、面白ければ誰にでも役割を与えてくれる。国土交通省や環境省、内閣府、国立歴史民俗博物館、都市住宅学会・日本生活学会理事会など東京出入りも面白かったが、大阪こそが私を育ててくれた。大阪では、市長や区長のアドバイザーになり、地域公共人材制度をつくり、青少年問題協議会会長、UR連続講演会、近畿建設協会など、楽しい経験をした。今も、阪大の授業として、うめきた、箕面まちやま、NEXCO西日本などに関わっている。

有瀬の神戸学院大学へは三宮から直通バスがある。が、コロナ太りを解消するため、朝霧から歩いている。朝霧は、神戸新聞の山口さんが住んでおられたところ、神戸まちづくり研究所が再生に関わっていた明舞団地がある。有瀬キャンパスの高層のゼミ室からは、子育てをした西神ニュータウンや、環境未来島特区として関わった淡路島がみえる。青年教師として走りまわった鈴蘭台から学生が来る。故郷の海山街に囲まれ、故郷の後輩とともに、歴史の深みから町や暮らしを学ぶ機会を与えられた。ありがたい。

♪神戸、神戸と、皆、言て来るが、神戸、暑いか、皆、裸♪

瀬戸内の人々は、徳仁親王殿下の修士論文にあるように、中世の兵庫北関入船帳以来、兵庫上がりの出稼ぎを繰り返してきた。近代の貿易港神戸には、裸で荷役仕事をする男たちがいた。出稼ぎは、成功するとは限らない。喜劇役者大村崑は、親戚に預けられた子供

時代、家出して道を失い、故郷篠山に続く兵庫駅西改札に裸足で立っていた。不憫に思った見知らぬゴツい男に背負われて、一晩泊めてもらった。その道すがら、兵庫大仏の前で、男が諭した。

「ぼん、兵庫・神戸のなんどいや。忘れたらあかん」と教えてくれた。一方、中突堤の先の奄美航路の待合室には、夢敗れた奄美出身者が集まっていた。

1954年、新長田駅が請願で開業した時、僕は、当時、新神戸と称していた新長田の長屋に生まれた。両隣は、奄美や朝鮮出身者だった。灘のダンロップ（後の住友ゴム）に勤めていた父親は、早世し、番町部落と道一つ隔てた新開地の神戸タワーをのぞむ兵庫区下沢の親戚の長屋に居候させてもらった。高度経済成長期であった。南京虫や公害はあったが、神戸が元気だった頃だ。「エーとこエーとこ新開地」の囃子言葉や、花電車の「みなとの祭」のにぎやかな音楽が耳に残っている。

叔父は役所勤めが合わず早くして隠居、世話してくれた「イトさん」（長男の嫁をそう呼んでいた）は、女土方をしつつ家事をし、甥っ子の私たちを育ててくれた。4世帯、20人の大家族だった。兵庫突堤だったろうか、白く眩しい土方現場が目に焼き付いており、三輪明宏の「よいとまけ」の歌を聞いたとき、昔を思い出して涙がとまらなかった。

私が、下町、巢窟、部落に関心を持ち、新開地のような河川敷の都市的なるもの「河原町」の都市民俗学を博士論文にしたのは、必然だったかもしれない。

このように、神戸の記憶を秘めつつ、大阪出稼ぎの私に、神戸を思い出すきっかけを与えてくれたのが、1995年の阪神淡路大震災復興まちづくりであり、神戸復興塾、神戸まちづくり研究所だった。確か、建築家の坂茂さんが家具で復興住宅を作りたいと市民復興まちづくりを主導していたコープランの小林さん（元理事長）に相談し、金木犀のかおる事務所に呼びつけられたのが最初だった。野崎理事長に最初に会ったのはこの時だった。焼け跡の長田で活動している者として、白羽をいただいた。長田では、関西大学の三谷さんが、長田の良さを活かしたまちづくり協議会で活動しており、それに加えていただいた。このなかには神戸医療生協のメンバーが多く、上田院長とも出会った。私のつきあっていたおばさん達のなかには、室崎先生のファンがいて「室崎先生の話を聞く会」があったように記憶している。

こうした動きを、震災一周年の東京への語り部キャラバンに統合し、復興塾につなげたのが、大津さんだった。芸術活動の中心、島田さんや、市議の浦上さん、農業の大村さん、プロのプランナーのみならず、多様な人と議論する機会を与えていただいた。区画整理の基礎もわかっていない私に「あんなあ、区画整理いうんは」と丁寧な教えてくれたのは辻さんだった。

兵庫・神戸の身体記憶、大阪での経験、神戸まちづくり研究所での学びを生かし、66歳になって、歴史の深みから町を考える教育に関わる機会を得た。神戸学院大学と神戸まちづくり研究所の連携も視野に、もう少し頑張ってみようと思う。

まち研サロン報告

松原永季（副理事長）、菅磨志保（理事）

「ポストコロナ社会へ向けての展望」

2020年度、定期サロンは上記タイトルをテーマとし開催することとしました。担当は理事・菅磨志保と副理事長・松原永季で、2020年8月25日、10月23日、12月21日のそれぞれ18時30分から20時過ぎまで、合計3回、Zoomを活用し実施しました。

第1回目は、コロナ禍の影響にあってお考えの、多様な意見・提言をいただきました。まず、「**移動制限に対し、地域で自立できるシステム構築の必要性**」が指摘されました。最低限の生存を維持するためには、地域で自立できるシステムをもっておくべき、すなわち、開放的ネットワークと同時に、地域社会での足元を固めることの重要性のご指摘です。また「**コロナ禍による社会への影響拡大への懸念**」も示されました。失業者の増加、福祉等への財政支出減少、地域の疲弊からの再建、などの具体的な課題についてのご指摘です。他にも「**文化活動におけるオンラインの課題や可能性**」の論点も提示されました。音楽はライブで視聴したいというニーズがある一方、規模の巨大化に、技術で対応してきたという歴史もあり、アフターコロナの可能性についてのご意見です。

そして最も多くの時間を割いて議論されたのは、「**オンラインによるコミュニケーションの限界と可能性**」というテーマでした。「オンラインで失っていることって、あまり無いのでは？むしろ可能性を拓けているのでは？」という意見がある一方、「オンラインでは限界がある。オンライン化する部分は必要だが、地域活動は会って行わないとできない。」という反対の意見も示されました。実際上の経験の中では、様々なオンラインコミュニケーションツールの開発や活用が試行錯誤されており、一定の有効性が確認されている一方、そもそもオンラインツールを活用できない人、対応できない活動があるなどの紹介もありました。そして「**身体的に触れ合わずに触れ合うこと**」「**オンラインとオフラインの信頼関係**」など、**オンラインとオフラインの関係性**に関する議論に移行し、時間切れとなりました。

第2回目の議論は、オン/オフラインのそれぞれの特性を確認するところから、始まりました。やや強引ですが、それぞれで示されたキーワードは、以下のように整理できます。

オンラインの特性	オフラインの特性
バーチャル	リアル
距離による制約なし	距離による制約あり
言語が中心	五感・雰囲気など言語以外の要素多い
ロジック中心	共感・メンタル中心
ルール中心	マナー中心
ジェイコブズの商人道	ジェイコブズの武士道
チェック（評価システム）機構なし	チェック（評価システム）機構あり
水平的広がりに向く	歴史など垂直的広がりに向く
会議の条件がツールにより規定される	規定される要件が少ない
情報の信頼性に乏しい	情報の信頼性が高い

議論の過程では、オン／オフの循環を意識することの重要性の指摘もありました。このテーマは3回目にも引き継がれることとなりました。

また、これ以外にも「ツールが使えない／使わないことが行動する際の制約になっている」「リモートが進展すると、都市部への集中が緩和される可能性がある」「支援の対象にしている人達が一層窮地に陥っている状況も生まれている」「居場所づくり、災害支援など、市民活動の実態についての議論も必要」といった論点も提出されています。

第3回目は、前回の論点を受け、市民活動の実態に関する報告から議論が始まりました。ニュータウンでの総会や理事会の開催事例、大阪ボランティア協会の機関誌のコロナ特集、コロナに関わるNPOの情報発信プラットフォーム、卒論に必要な調査ができない学生達の問題、YouTubeを併用した地域の会合、中山間地と都市部でのイベント開催に対する意識の相違など、各参加者が体験した事例が報告されました。

その後、地域活動の継続・継承に議論が移り、特にオンラインの特性として、「**形式知化されない暗黙知の継承が困難**」という視点が提示されました。言い方を変えれば「背中を見て学べ」ということが難しい、ということです。暗黙知はマニュアルではなく、普段の継続や振り返りや活動の展開により形成されるもので、「**意味もなく集まっていることの意味**」がそこにある、との趣旨です。裏返せば、「オンラインは意味を問う羽目になっている」「オンラインは、目的性が先に立ってしまい、結果として目的や意味を発見するような(情念的)活動が失われる」という指摘です。そして同時に、「**オンラインの最大の欠陥は、空間・場を共有していないこと**」という根本的な指摘があり、「(オンライン以外の)何かを共有することの意味」を問うことの重要性も語られました。

3回の議論の過程では、「オンラインコミュニティの可能性」が論点の中心であり、結果として「オフラインの意義」を再検証する必要があることが示されました。その際、上記の論点を念頭におけば、「オン／オフのハイブリッド」もより豊かになるのではないかと、進行しつつ感じた次第です。

2021年度もwithコロナの状態が続いていますが、3回のサロンを通じて得られた気付きや課題を、「市民活動／まちづくり」をテーマに、もう少し掘り下げていきたいと考えています。この1年の間に、制約のある中で工夫しながら可能な活動が試行され、またそうした試行的な実践や活動上の課題を把握する調査も行われてきました。今後は、こうした実践や調査をされた方をゲストにお招きして、with/postコロナを考えていくために有益な情報を提供してもらいながら、一緒に考えていける「場」を持てたらと考えています。

企画の持ち込みも含めて、気軽にご参加下さい。

まち研事業 now 浅見 雅之 (理事・事務局長)

まち研事務局長が、まち研の事業の全貌を紹介するこのコーナーですが、今回は 2020 年度を振り返ります。まあとにかくコロナにやられた1年でした。で、コロナの勢いは止まりそうにありません。「コロナがあけたら」「この状況が落ち着いたら」と何度聞いた・言ったことか分かりませんが、たぶん「あけない」んだよね。これ…。

ということで、自分の周囲は全て感染者だと思って行動するという、新しい行動様式をとるしかないってことですよ。幸いなことに「空気感染」しないですし「手にウイルスがついても体内に取り込まない限り感染しない」そうなので、対処の方法はありますよね。もう全員感染者として取り扱うなら建物の入り口で検温する必要もないんじゃないかと思っています。

さて、2021 年度の収益・非収益事業の総体を事業の大きさ（予算規模）に応じてマッピングしてみました。（O.L.はオンライン活用。無色点線部分是非収益事業）

研修受け入れ事業

宜野湾市→まちラボ

一部
O.L.

香美町 UD 社会推進

養父市ボラ防災研修

全面
O.L.

講座・勉強会事業

まちづくりサロン
まちラボで開催

一部
O.L.

まち研サロン
ポストコロナ社会展望

全面
O.L.

アドバイザー派遣事業

北区地域アド派遣

団地再生事業

旧あかねが丘学園
跡地プロポ支援

狩口台再生検討

居住支援法人支援業務

居住支援法人の運営
立ち上げ支援策検討

一部
O.L.

その他事業

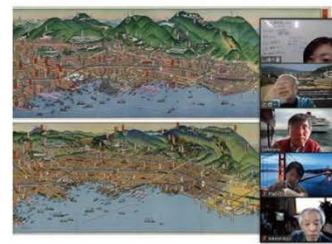
ニュース他

まち活拠点まちラボ企画運営業務

まち活拠点まちラボ企画運営事業

専従スタッフ2名

積極
O.L.



まちづくり開館夜間貸館対応

被災地支援事業

山元町被災地コミュニティ
再生支援事業（宮城県助成金）

専従スタッフ2名

一部
O.L.



復興
まち
づくり
支援

一部
O.L.

復興支援員等活動研修業務
（東北コンソからの委託）



一部
O.L.

事業規模としては、まちラボの事業が法人経営を支えていることが分かるかと思います。

まちラボの事業は、受託金額の面からだけでなく、当法人が目指す市民社会の形成を支援する活動の中核となる事業内容でもあるため、継続的な受注をしていきたいところですが、こればかりは発注者の意向もあって予算化は難しいです。神戸市都市局のビジョンと私たちのビジョンをすり合わせながら、継続受注が可能となるよう努力していくしかありません。

このように、近年資金的にはちょっと余力の発生している当法人ですが、そもそも独自に資金を得る仕組みがなく、行政等の事業計画・発注内容に大きく左右される構造であるため、基本的に経済的基盤は脆弱と言わざるを得ません。

これまでも議論されてきているところではありますが、会員の皆さんの能力を最大限に発揮していただき、収入につなげるような戦略が求められています。うー。「言うは易し」ですが、なかなか難しいところですね。会員の皆さんからのアイデアを強く求めます。みなさんアドバイス下さい。

前年度まで、当法人で雇用していた宮城県山元町の橋本さんと岩佐さんのお二人は、昨年、現地で一般社団法人「東北まちラボ」を立ち上げました。当法人との雇用契約は発展的に解消し、今後は東北まちラボで山元町を中心とした復興コミュニティ形成支援を続けます。当法人としては東北まちラボとの事業協力のもと、復興まちづくり支援を継続していきたいと考えています。

というワケで、東北の復興関係の受注もなくなったため、財政状況はさらに苦しい状況になっており、今年度は総会において、赤字予算を計上せざるを得ない状況です。

また、この間、いくつかの事業コンペ・プロポーザルにエントリーしましたが、どれも不採択となっており、状況はあまり楽観視できません。

とはいえ、当法人の会員の皆さんのポテンシャルは大きいと自負しており、皆さんのご協力のもと、新たなチャレンジを続けていきたいと考えていますので、ぜひぜひご協力をお願いしたいと思います。どうかよろしく願いいたします。(事務局長 浅見)

発行:特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所

〒658-0013 神戸市東灘区深江北町4丁目8番19-202号 TEL: 078-855-8520 FAX: 078-436-2121

E-mail = LET07723@nifty.ne.jp Homepage = <http://www.kobe-machiken.org/>